

町医者だより

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

令和04年11月号

骨粗しょう症ビジネス

骨粗しょう症は、骨塩密度の低下と骨構造の変性による加齢現象で骨折のリスクが増加し、日常生活が送れなくなることしばしばです。今月は骨粗しょう症ビジネスの疑問について述べたいと思います。

骨密度測定方法の間

骨密度の検査は通常DXA法またはDEXA法 (dual energy X-ray absorptiometry) で測定することが世界的な標準になっています。これは専用の機械で測定します。私が開業した2006年以前からもそうなっていました。多くの整形外科が骨粗しょう症ビジネスを展開しているのですが、DXA (DEXAと表記しているところもあります)の器械を使用しているか確認すべきです。DXA (DEXA)の器械は高額なため使用していればホームページにその存在を謳っているはずですが、通常のレントゲン写真から骨密度を測定するMD (マイクロデンシトメトリー) 法や超音波法はインチキとは言いませんが世界的には推奨されていません。また骨密度を測定する部位も大事です。ネットで出て来る日本の古くさい2012年版のガイドラインでさえも「骨粗鬆症の診断には、腰椎と大腿骨の両方を測定する」としています。腰椎部はL2-L4領域やL1-L4領域で、大腿骨部は頸部領域と近位全体領域でとなっています。手や足先で検査している先生は心苦しくないのでしょうか？

治療効果の確認は

治療効果を採血の結果でしか説明していない整形外科が多い印象です。「骨形成」マーカーであるP1NP (I型プロコラーゲン-N-プロペプチド) またはBAP (骨型アルカリホスファターゼ)、「骨吸収 (破骨細胞による骨組織の吸収・破壊の状態)」マーカーであるTRACP-5b (骨型酒石酸抵抗性酸性ホスファターゼ-5b)、NTX (I型コラーゲン架橋-N-テロペプチド) ないしはDPD (デオキシピリジノリン) を採血しています。それでは骨密度はどうなんでしょうか。ここが一番肝心なところではないでしょうか。骨密度も改善していますという論文がありますとおっしゃるかもしれませんが、それらの論文は実臨床 (リアルワールド) と比べて結果が良すぎる場合がしばしばです。また、3年後、5年後と長期的な骨密度の改善、維持できているのか知りたいところです。

治療の継続の必要性

ビスフォスフォネート製剤を通常使用します。ビタミンDは無意味とNEJM 2022年7月28日号にも掲載されていました。ビスフォスフォネート製剤は5年使用していったん中止 (ドラッグホリデイ) し再開するか決めることになっています。これは大腿骨転子下骨折や大腿骨骨幹部骨折といった通常みられない非典型的大腿骨骨折の発症リスクが増加するためと言われています。5年使用後にビスフォスフォネート製剤をやめることの説明がきちんとされているかどうか。さらにいうと、フレイル予防策とともに認知症、心不全、睡眠薬服用などによる転倒のリスクをいかに軽減し転倒を食い止めていくかという観点からも内科医がもっと積極的に介入していく必要がある分野と考えます。